
雨

鈴蹴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Zマーク】

N1704E

【作者名】

鈴蹴

【あらすじ】

少女の恋。それは少女にとって、世界の全て。それを失ったとき、少女の心もまた、壊れてしまう。だけど、大切なことは、その先にあった…。何気ない景色が落とす気持ちの変化を、ある大好きな歌を参考にしながら短編に詰めてみました。

「他に、好きな人が出来たんだ。」

ケロッとした表情で、彼が言つ。
目の前が、真っ暗になつた。

「だから、君とはもう、これで終わり。」

彼が続ける。

あたしは何も言わはず、ただ立ち去りしていった。

「じゃあね。」

彼が背を向ける。

泣き言、怒り……言いたいことはたくさんあるのに、言葉が出てこ
ない。

あたしは彼の背中を、ただ黙つて見つめていた。不思議と、涙は
出なかつた。

太陽が、嫌味なほど眩しく照り付けていた。

下校中の子供たちが、追いかけっこをしながらあたしの脇を走り
抜けていった。

その子供たちの笑い声が、やけに煩わしかつた。

とぼとぼと肩を落として家に向かう道のつ。いつもは彼と歩いて
いた道。

彼といふときはあつとこゝに家に着いてしまつた、一人で歩くとやけに長く感じる。

歩きながら、あたしは彼とのことばかり思い出していた。去年、同じクラスになつて、仲良くなつて、付き合つようになつて…。

一人で笑いながら叫んだ遊園地のジオラマ・コースター。学校からの帰り道、毎日のよつに彼と立ち寄つたカフェ。傘を忘れたあたしが濡れないよつ、隣で傘を傾けて相合傘をしてくれたこの帰り道…。

あたしは再び空を見上げる。

太陽が、嫌味なほど眩しくあたしの目を焦がした。

「おかえりなさい。」

家に帰ると、お母さんがあたしに声をかける。

「ただいま」を言う気力もなくて、あたしは無言のまま靴を脱いで自分の部屋へ向かう。

部屋に戻つたあたしは、大きな溜息をついた。

いつもなら、『ただいま』ってメールを彼に打つのに…。

無性に寂しくなつた。

姿見の前に立ち、

机の上のペン立てにペンに交じつて立てられたカッターナイフを手にする。

カチカチカチ…と音を立てながら、カッターナイフの刃を伸ばす。そして、左手の手首を姿見に映るように正面に向け、右手に持ったカッターナイフを…。

ゆつくつと、左手の手首に押し当てた。

すうっと、カッターナイフを引く。

左手の手首に線が入る。少し遅れて、血が流れ出す。

まだ、足りない。

あたしは何度も、同じように左手の手首に何度もカッターナイフを走らせる。

何度も、何度もカッターナイフを走らせた左手の手首から流れ出す血が、

あたしの左腕を伝わって、肘からぽたぽたと部屋のカーペットの上に落ちる。

その景色]を境に、あたしの記憶は途切れた。

・・・・・

目を覚ますと、あたしは病院のベッドの上に居た。
左手の手首には、ぐるぐると巻かれた包帯。

…あたしはきっと、あのまま氣絶してしまったのだな。

ふと、窓の外を見ると、外は雨。

…頬が雨に濡れてしまえば、雨水に紛れて涙を流すことが出来た

のに。

木々に雨粒が降り注げば、木々の葉が鳴らす雨音に紛れて大声で泣くことが出来たのに。

そんなことをぼんやりと考えていた。

昨日が晴れていたことを悔やむのではなく、今日が雨であったことをあたしは悔やんだ。

…思いつきり泣いたら、少しは楽になれたのかな。

窓の外、病院の前の道には、傘を差して歩く人々の姿。あたしは、その傘の列を眺めながら、彼が好きだった歌を口ずさんでいた。

「…沙希？」

不意に、声が聞こえた。

口ずさんでいた歌を止めて振り返ると、お母さんが立っていた。

「良かつた…。」

そう言つと、お母さんはその場に膝をつき、ベッドの脇に頭をついて泣き崩れた。

あたしは、すぐそこにあるお母さんの頭を、そおつと撫でてあげた。

…生きていて良かつた。そう思つた。

今思うと、バカなことをしたなあつて…。

あたしの傷は、血の量の割にはたいしたことがなかつたらしく、

意識を取り戻したあとでくつかの検査を受けて、次の日には退院することになった。

退院したあたしの手を、お母さんが握つて歩き出す。外は、まだ少し雨の跡が残る、さうさうした晴れの日。

お母さんに手を引かれて歩く道。

：彼と一緒に歩いた帰り道と、同じ道。

見慣れたはずの景色は、まだ残る雨の名残のせいかどうか分からないけど、

ちょっとだけ、違つて見えた。

さうさうと、木々が、アスファルトに出来た水溜りが、光を放つ。そして、前を歩くお母さんの背中。見てみると、なんだかとつても安心できた。

こんなに綺麗な景色があつたのに、どうしてあたしは気付かなかつたのだろう。

こんなに綺麗な景色も知らないで、どうしてあたしはあんなことをしたのだろう。

「…」じめんね。」

あたしは、お母さんの背中に小さく呟いた。

心配かけて、『じめんなさい。バカなことをして、『じめんなさい…。

「ん？ なあ」「？」

お母さんが、振り返つてあたしの顔を見る。

そして、目が合つと、ちょっとだけ照れ臭かつた。

「ううん、なんでもない。
なによー、教えなれこよ。」

そう言つて笑つむ母さんに、あたしはようやく笑顔を向けた。

あたしとお母さんを追い抜いて、下校途中の子供たちが走つてゆく。

その笑い声が、とても心地よく感じられた。

空を見上げると、太陽さえも笑つていて見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704e/>

雨

2010年10月8日22時09分発行